ユニセフ子ども物語
地球に生きる子どものくらし

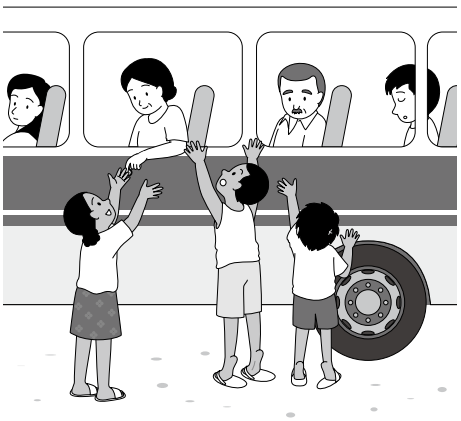
Republic of Sierra Leone

シエラレオネ共和国

地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。

施設の「外」へ おばさんとの再会

13歳のマリアトゥは、4年近く前から保護施設で暮らしています。彼女は、3歳のときに内戦で両親を失くしました。祖父母に引き取られ、7歳まで一緒に暮らしていましたが、貧しくて、ごはんが毎日食べられないことや、学費が払えず学校を退学しなければならなかったことなどがつらく、家を出ました。9歳のとき、首都フリータウンのバスターミナルで物乞いや周辺のお店でお皿洗いをしていたところ、保護施設を運営するNGOスタッフに保護され、施設で暮らすようになったのです。施設では、小さい子どもたちのお世話をしたり、当番の掃除をまじめにしたり、物静かですが、責任感のある子だと施設のスタッフからは信頼されています。学校に通うのが大好きで、得意科目は数学です。将来の夢は看護師になることです。



マリアトゥは、ユニセフが支援する再会プログラムで叔母さんに会うことができたので、保護施設を出ることになりました。施設を離れる日、施設の友だちが、マリアトゥのためにお別れ会を開いてくれました。毎日一緒に学校に通っていた友だちや、ご飯を作ったり洗濯をしてくれたりする寮母さんとお別れのあいさつをしているうちに、マリアトゥは寂しくなって泣いてしまいました。でも、NGOスタッフが叔母さん一家と暮らして施設の「外」に出て社会生活を送れるようにすることの大切さや、これからも施設のみんながマリアトゥを忘れないこと、NGOスタッフが定期的に家庭訪問することなどを聞いて、自信を持って叔母さんのところに行く決心をしました。

叔母さんとマリアトゥが再会したとき、二人とも不安げでした。叔母さんは、自分の子ども5人に加え、マリアトゥを育てていかなければいけないという責任を感じ、マリアトゥは、新しい場所で生活していくことに心配もあったのでしょう。しかし、再会セレモニーを終えた後、マリアトゥは、「早く生活に慣れるから大丈夫よ。将来の夢に向かって頑張るわ。」と笑顔で話しました。

<文・構成：(財) 日本ユニセフ協会>

物語の国
シエラレオネ共和国

アフリカ大陸西部の大西洋に面するシエラレオネ共和国は、人口およそ580万人の自然豊かな国です。かつて英国領だったため、公用語は英語です。主要産業の一つであるダイヤモンドが、2002年に終結した10年以上にわたる内戦を長期化させたと言われています。現在、国は緊急支援が必要な状況から、持続可能な開発支援が必要な状況に移行しています。

©日本ユニセフ協会
コミュニティ唯一の保健所。
保健スタッフがいるのみで、人材、設備ともに適切な環境とはいえない。

親を失った子どもの保護とケア

子どもが生き成長するのが難しい国

シエラレオネは、長く続いた内戦の影響で社会的なインフラ整備が遅れ、基本的な保健サービス、適切な衛生設備などが不足しています。また、計画立案・実施に中心的役割を果たすべき政府についても、その能力が非常に限られています。その結果、栄養不良、マラリア、肺炎など予防・治療が可能な病気が原因で、およそ5人に1人が5歳の誕生日を迎えることなく命を失っています。また、国内の子どもの11.3パーセントが内戦や病気などが原因で孤児となっており、その多くは親類などを頼って暮らしています。しかし、家庭によっては経済力がなく、子どもを受け入れることが家計に大きな負担となってしまうケースもあります。結果的に、保護を受けられず、家庭内外において、暴力や搾取の対象となってしまうことも少なからず起こっています。

©日本ユニセフ協会
ヘルスポスト（保健所の形態の一つ。保健所の中でも規模が最も小さいもの）に来ていた母親と子ども。

シエラレオネの状況

（より詳しい統計は『世界子供白書　特別版』をご覧ください。）

項　目	数　字
5 歳未満児死亡率（2008 年）	194 人(出生 1,000 人あたり)
乳児（1 歳未満）死亡率（2008 年）	123 人(出生 1,000 人あたり)
妊産婦死亡率（2003-2008 年）	860 人（出生 10 万人あたり）
平均余命（2008 年）	48 歳
国際貧困ライン 1 日 1.25 米ドル未満で暮らす人の比率（2007）	53%
初等教育純出席率（2003-2008 年）	69%
成人の総識字率（2003-2008 年）	38%

出典：『世界子供白書　特別版』

家族との生活をとりもどす「再会プログラム」～NGOとの取り組み～

ユニセフ・シエラレオネ事務所は、子どもは、親もしくは血縁者の元で成長していくべきであり、また、保護施設は、なるべく早く子どもを保護者の元に戻し、新たな保護が必要な子どもを施設に迎え入れるように努力するべきであると考えています。調査によると保護施設で暮らす子どもの3割は、両親もしくはそのどちらか一方がいることが分かっています。ユニセフは、子どもと保護者の再会プログラムを強化しようとしているところです。

ユニセフが支援するイギリスのNGO“St. George Foundation”の保護施設（孤児院）による再会プログラムのプロセス

①受け入れ先を見つける
＊施設に入った子どもとのカウンセリングによって、およそ90パーセントの子どもたちの親戚の情報がわかり、保護者となる人を探し出すことができる。

②受け入れ先への説明と受け入れ交渉

③保護者となる人たちと子ども本人へのカウンセリング（最低1週間）

©FNSチャリティキャンペーン
マリアトゥと叔母さん一家の再会セレモニーのようす。セレモニーに地域の人たちが参加することは、一家への理解にもつながるので、大切な行事である。

④受け入れ態勢が整ったら、再会セレモニーを実施
＊NGOと保護者の間の誓約書の取り交し。
＊支援金の提供（扶養家族が一人増えることは、受け入れ家族にとっても大きな負担となるため、生活費や学費などのサポートを行う。）

⑤モニタリングとフォローアップ
＊新たな生活になじめない子どもが多く、保護者のもとから逃げ、路上生活を選ぶ子どもも出てきてしまうため、再会後、定期的に、特に初期のうちは週2回家庭訪問し、フォローアップする。

整備が遅れる「子どもの保護」分野

現在、親や親類の保護を受けていない子どもに対するケアや保護について、シエラレオネ政府の所轄官庁による制御が及ばない状況にあり、身寄りのない子どものための保護施設に対する明確な規制、基準、そして国側のモニタリング機能がほとんどありません。その結果、国外との養子縁組や児童売買にまで繋がるケースが多々あります。この状況に対し、ユニセフは、暴力、搾取、そして虐待から子どもたちを守る責任がある政府を効果的に援助するため、長期的な子どもの保護システムの開発・構築を行います。ユニセフは、以下の3つの分野　①各省庁、郡議会やコミュニティの責任を明文化し、適正な法的かつ政策的枠組みを整えること　②子どもへの虐待などの予防と対策のため、政府やコミュニティの能力を強化すること　③調査と評価データをもとに、子どもの保護に関する知識を開発することに重点を置いて活動しています。